

図画工作教育講座 1 4 《 指導案 》

附属小学校実習要項を基に説明して「6年・心の情景を版画で表そう」指導案を作成。

学校現場で通常使用されている基本形式なので省略。講座修了時の感想（アンケート）を掲載。

* 私がこの講座で学んだ中で最も重要であり、心に残ったのは、「絵があまり上手でなくても先生になれる」ということです。

私はずっと小学校の先生になりたくて、図工以外の教科は勉強すればどうにかなりそうだけど、図工だけは小さい頃からとても苦手で、先生になりたいけど図工があるし、という感じでした。

しかし、この講座で「絵が上手じゃなくても先生になれる。大事なのは子どもの発想力や表現力」ということを学んで、自分でも出来るかもと、思いました。

絵が上手でない先生だと、絵が得意な子と得意でない子の二極化になってしまうけれど、私と同じ絵が苦手な子が、のびのびと絵を描けるなら、それはとてもいいことだなと思いました。また、図工が得意な子、苦手な子がいるのは当たり前で、苦手な子にどのような言葉をかけたら少しでも図工を好きになってもらえるのか、得意な子にはどのような言葉がもっと得意になり、より表現が豊かになってくれるのか、それを考えるのはとても重要であるけれど、とても難しいことだなと思いました。図工が苦手な子にとって、先生の声掛け一つで、好きにも嫌いにもなると思うから、何処が分かっているのかを、先生である私がきちんと理解し、指摘しないといけないと思いました。

図工が苦手な先生でも、デメリットだけでなくメリットもたくさんあると教えてくれた、とても有意義な授業でした。ありがとうございました。

* 「画家の卵を育てるのではない」という言葉が、一番重要だと感じた。

自分は、工学部からこの講座を受講したが、子どもの成長に合わせるのはもちろんのこと、意欲を高めるための接し方であったり、表現方法を養わせたりする方法まで考えて、図画工作の教育がなされていたことを知り驚いた。すごくためになる講座だった。

* 私は、不器用で絵を描いたりものを作ったりすることが本当に苦手だ。小学生のときに一生懸命つくった作品を先生に見せたら「もう少し真面目につくりなさい」と言われたことがある。私は本当に頑張ってたのに、その言葉にひどく傷ついた。それから図工は本当に嫌いになった。

大学生になってこの講座で小学生のときに受けていたものと違うことを学んだ。それは、感じる心が大事なことやいい作品は自分の思いが伝わることなどで、それからこの講座で絵を描いたりするのが楽しくなった。

「不思議な魚」を描いて後、全作品が紹介され、自分のが出てきたときはとても嬉しかった。

教師が生徒一人ひとりの作品に向き合うことが大切だと、この講座で学び、私も教師になったら生徒の思いを大切に、心を育てたい。

* 私がこの講座を通して学んだ中で最も重要だと思ったことは、私自身が図画工作という教科を教える心構

えを持つことができたということです。この講義では、小学生に有効な図工の技術や表現方法などの専門的知識や評価の方法や授業のつくりかた、重要なポイントなど様々なことが説明されてきました。そして講義中に、絵を描いたり切り絵をしたりしているうちに、今度は私がこれらを教えていく番なのだと思うようになりました。そうすると、講義がとてもいい参考になりました。

正直、私は絵を描くのがあまり得意ではないし、専門的な知識を持っているわけでもない。しかし、今回の講義を通して少なからず図工への知識は備わったと思うし、何よりも図工を教えるという自覚を持てたことが、私にとって、やはり何よりもこの講義で学んだ最も重要なことだと思いました。

* 私はこの講座で、技法や指導法など様々なことを学んだが、その中で最も重要だと思ったのは、教師としての図画工作への向き合い方、姿勢であった。

私が児童だったとき、絵を描くのは得意な方だと思っていたので、図工の時間は好きだった。しかし、苦手な工作や鑑賞のときは、どうしてもあまり楽しむことが出来ていなかった。その裏には「先生の好むものをつくりたい」とか正解を求める気持ちが大きかったように思う。自分で悩む前に、どうすればいいのかを尋ねてしまう癖は、今でも残っている。

しかし、この講座を受けて、私のような児童を生んでしまっただけではいけないと思った。表現することに正解はないということを子どもたちが知って、互いに認め合えるようになってもらいたいと思った。教師は、自分の描きたいものを押しつけて「正解の絵」をつくってはいけないと思った。子どもたちが自信と安心感を持って制作できる環境をつくらなければならない。

教師として、図画工作の授業で子どもたちを成長させていくために、講座で学んだことは、自分の中にいつまでも残しておきたい。

* この講義の中で私が一番大事だと思ったことは、『生徒に指導する際「絵のうまい子」を育てることを目標にしない』ということである。この講義の中で、皆それぞれいろいろな絵を描いたが、その個性を生かすことを先生が認めてくれたからこそ「図工ってこんなに楽しかったんだ」ということを実感できた。やはり何かを学ぶためには、それを楽しいと思うことが重要だと思った。

* 私が最も重要と思うことは、教師としての取り組みである。

私は図工が苦手だったため、教師となるうえで大きな不安があった。しかし、苦手な人が教えることができるのかという不安は、この講座を受けて大きな期待へと変わった。子どもが積極的に取り組むためにどうすればよいか、図工が苦手な子への対応、そして実際に子どもに教えるうえでの工夫について学ぶことができた。「よい絵とは何か」のプリントを配られたが、子どもが自分なりに精一杯描いた絵をしっかりと評価できるような教師になりたいと思った。

子どもが図工を好きになる教師の取り組み、支援について今回の講義で学んだことを活かしていきたいと思う。

* 私が重要と思ったのは、参考作品の見せ方です。

参考作品を見ることで、自分にも出来るのではないかという安心感と自信が付きます。そのように思わせる参考作品を選ぶことが大切だと思いました。

私も絵が得意な方ではありませんでした。しかし、同じ学年の人の絵をたくさん見に行くことで、固定概念がなくなり、絵を描くことが好きになりました。だから、たくさんの種類の参考作品を見せたいと思います。

図工は、会話するのが苦手な人でも、自らを表現できる1つの場だと思っています。そのきっかけを作ることが出来るのは授業の最初に、興味関心を持たせる参考作品の見せ方だとも思います。また、参考作品を見て友人と自分の感性を伝え合うことも、心を開く1歩になるのではないかと思います。

* 今まで私は、図工の時間は「上手く描かない」と思って小中学校を過ごしてきました。できるだけ似せて、きれいに描こう描こうとしていました。先生もそれを誉めてくれていました。だから、想像力を働かせてとか好きなものを自由に、といわれる図工の時間は苦痛でしかありませんでした。

この講座で、上手く描かなくてもいいんだ、表現することを楽しむような子どもを育てることが大事だと知り、今までの固まった考えが一気に開けたような感覚がありました。いろいろな技法を表現する手段として学び、そしてそれを使って自分の表現をする楽しさに触れれば、図工の時間は楽しいものになるだろうなと思ったのです。そうして培われた土台は、生涯生活に彩りを与え続けるものになると思います。教師になる前に気付くことができよかったです！。

* 私は、この講義を受けるまでは、絵を上手に、そっくりに描くというような「画家の卵」を育てることが、よいことだと勘違いしていました。しかし、そうではなく、表現することの楽しさや面白さ、子どもたちの感性を大切にすることが、一番大事なことだと気付きました。

この講座の中で、知らなかったことや図工の面白さをたくさん学ぶことができ、とても参考になったとともに、図工の楽しさも感じることができました。子どもたちにとって上手に、そっくりに描かなければならない」というプレッシャーではなく、楽しさを感じるような授業を、私もつくってみたいです。

* 「失敗してもよい」と伝えることは、本当に重要です。失敗しても大丈夫、許してもらえ、やり直せると、思えることで、生徒は思い思いに、大胆に製作活動をすることができ、本当の意味で感性が大きく育つと思います。技能だけでなく、その子一人ひとりの表現を見つめ、伸ばし、大事にしていく。そんな指導のできる教師になろうと、講義を通して思いました。

* 私は、子どもが表現することの手助けや考えの引き出しを手伝ってやるのが、図画工作における教師の役割だ、という話にとっても納得したから、このことが最も重要だと思った。

* 子どもの感性を尊重することが、最も重要だと思いました。

この講義を受ける前は、私は図工や絵が苦手で嫌いでしたが、今では図工や絵と少しは近づけたように感じます。それは、上手な絵でなくてもいいということや、個性や感性を大切にすることを教わったからです。今度は、私が先生になって子どもたちの感性を認め、少しで磨き上げたいと思いました。

* 図工の授業は、子どもの心を育てるためにあるということです。

私自身が受けてきた授業は、絵が上手な人だけが評価されてきた授業だったため、心を育てるという考えは、この授業で学びました。

私は絵が下手なので、図工の時間がとても嫌いでした。まず、描き方を教わっていないのに、「ここは変えた方がいいんじゃない」と言われ、「どういう風に？」と疑問を持っていましたが、「自分で工夫してごらん」と言われるだけで、何をしたらいいのか全く分からなかった記憶が残っています。

しかし、この授業を受けて、技法や表現の仕方をしっかり押さえたうえで、子どもたちに任せることや、アドバイスも具体的にすること、教師の考えを押しつけないことの大切さを学びました。このような授業ができれば、図工が嫌いと感じる子どもは少なくなるだろうし、認めることが心を育てることに繋がっていくと思ったからです。

* 教師は図工の時間、指示し、見守り、指導に徹さねばならない。且つ、その指導はより具体的で、分かりやすいものにしなければならない。私がこの講座で学んだ中で、最も重要と思うことだ。出来そうで出来ない図工の指導が、とても分かりやすく明確なものとなった。

私自身、図工が大の苦手な人で、上手くできずに「先生、どうしたらいいですか」と言っても、先生は私に出来ないことばかりをアドバイスされた記憶がある。教師は、子どもに具体的な指示を出さなければならない。難しいことでも、教師は分かりやすく伝えなければならないのである。この教師の指示→見守る→指導のサイクルで、子どもは生き生きと表現を楽しめると思う。

* 私は大人になるにつれて、何事にもミスが減らして出来るだけ完璧にこなさなければと、思うようになってきました。しかし、図工教育においては、自分の思いを表現することの喜びや楽しさを実感させる必要があることを学びました。私がこのことを理解せず、図画工作の教壇に立っていたら、生徒にとって窮屈な授業になっていたはずなので、この講義は、本当に有意義なものでありました。

* この講座でたくさんの重要なことを学んできましたが、最も重要なのは「よい絵とは何か」です。

私は、手先が不器用で絵も下手で、いつも学校の先生に「絵描くの、嫌い」と文句を言っていました。この歳になって気付いたのは、あのときの先生は、自分にチャレンジしてもらいたかったのではないかと思います。この講座で「自分が感じたものを自分なりに表現～」と聞いて、「何であのとき、自分なりに頑張らなかつたんだろう」と思いました。「よい絵とは」の授業があった後、某ラジオで「絵には技法の上手い下手はあるけど、一番大事なのは見た人の心に響くかどうかだよ」といっているのを聞いて、なるほどなと自分なりに納得しました。

私が図画工作の指導をする際には、私みたいに、あのときもう少し頑張ればよかったと思わせないよう「絵のよさ」をしっかりと伝えていながら授業していきたいと思います。
半年間、本当に有り難うございました。